

# 「コロナビを用いた新 大腸内視鏡テクニック」

多田 正大 著

群馬県立がんセンター院長

長 廻 紘

大腸内視鏡は1960年代末に開発されたが、当初はもちろん、今に至るまで使いこなすのが難しい内視鏡であり続けている。生産者・使用者とも、何とか使いやすいものにしようと、努力が重ねられた。使用者側においては既にあるこのスコープをうまく使うという挿入技術の向上と、スコープの欠点を明らかにしてメーカーに改良を求めるという2つの方向があった。そういうコロノスコープ・コロノスコピーの世界で、最初からたくさんのアイデアを出し、メーカーを叱咤激励し続けてきたのが本書の著者、多田正大博士である。スコープの硬さ、太さの検討にことのほか意を用い、数々の論文とともに、実際に硬度可変式スコープ、細径スコープなどにその検討結果は生かされた。高い診断能を有する一流の内視鏡医であり続けるとともに、誰よりも機種の改良に意を注ぐ姿を、常に感嘆しつつ眺めてきた。

多田博士のもう1つのまねのできないことは、後進の指導に大変熱心だということである。それらの諸々の歴史が本書に流れ込んで、類をみない成書となった。100頁に満たない本であるが、“本は厚きをもって尊しとせず、内容の豊さをもって…”をまさに地でいく本である。DDW-Japan 2000でも即日完売したのもうなずける。

“コロナビ”とは耳慣れない術語であるが、“カーナビ”と同じく電磁波を利用して、挿入されたスコープの形状を知る“挿入形状観測装置”である(詳しくは本書をお読みください)。序文に“私がこの装置を最初に使用した瞬間から、これを用いれば大腸鏡挿入に難渋している多くのビギナーが救われる、多くの内視鏡医が育つと確信した。そして大腸内視鏡は一部のベテランだけの世界ではなく、普遍的な検査法になる予感に酔いしれた。”とある。多田正大がそ

う言うのだから、間違いはない。名は体を表すは例外もあるが多田博士には当てはまる。いい本の書評を書くのはうれしいものだ。

多くの学術書を上梓し続けてこられた師である川井啓市顧問(JR大阪鉄道病院)の、出版点数を上回ることを目標にしていると聞いたことがあるが、この本あたりで並んだのではないのでしょうか。これを新たなスタート地点として、経験と努力がマッチしたユニークな本を出し続けられることを切に望むものです。大腸内視鏡の世界にも、多田正大博士個人にも新しい境地をひらいた記念すべきこの出版に対して、心から“おめでとう”と申し上げます。

おめでとう。

● B5 頁93 図12 写真15  
カラー写真37 表8 2000  
定価(本体4,000円+税) 送料実費

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)